

文武朝の侍宴応詔詩

——唐太宗朝御製・応詔詩との関わり——

井 実 充 史

一、侍宴応詔詩の量産とその時代

『懷風藻』には、賜宴に侍して天皇を賛美した詩、いわゆる侍宴応詔詩が多数ある。具体的には、詩題に「侍宴」とある詩——日本古典文学大系『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』の詩番号で言えば、一・三〇・三五・三七・四一・四二・四四・五五・五七・七〇・七八・八一・八七——及び「応詔」の題を持ち、内容から明らかに賜宴に侍して詠んだとわかる詩——「春日応詔」(二四・一九・二〇・二四・四三)、「春苑応詔」(三八・四〇)、「元日(宴)応詔」(二九・六七)、「三月三日応詔」(二八)、「上巳禊飲応詔」(六一)——がそれで、二十四首ある。その数は懷風藻詩の二〇パーセントを占めて最も多い。しかし、それはけっして、各時代に渡ってコンスタントに作り続けられていたわけではない。

『懷風藻』は目録に「略以二時代一相次、不下以三尊卑一等級上」とあるように、ほぼ時代順に配列されている。そのことを踏まえて見てみると、冒頭の大友皇子「侍宴」の次には、一四番詩の紀

麻呂「春日応詔」まで侍宴応詔詩はないことになる。⁽¹⁾すなわち、河島皇子以下、大津皇子、釈智蔵、葛野王、中臣大島の中で、侍宴応詔詩を作った詩人はいないのである。

右の五人はすべて天武・持統朝時代に活躍した人々である。河島皇子は持統五年(六九二)薨、大津皇子は朱鳥元年(六八六)賜死で、両皇子とも持統朝に死亡しており、また、釈智蔵は、『懷風藻』の伝記によれば天智朝に入唐し持統朝に帰朝したとあるの⁽²⁾で、日本での活躍時期は持統朝であつたと思われる。葛野王は慶雲二年(七〇五)の卒であるが、その活躍時期は、正四位式部卿を授けられた持統朝に始まっていよう。中臣大島の活躍は、持統即位式や大嘗祭で天神寿詞を読んだころであらうし、また、持統七年(六九三)三月条に贈物を賜うとあるので、このころ死去したと推測される。

彼らに対して、紀麻呂は、持統七年六月に直広肆を授けられてはいるが、持統朝末期のことであり、その活躍はむしろ文武朝に入ってからと考えられる。事実、大宝三年(七〇二)には、藤原

不比等とともに大納言に任ぜられているので、文武朝の高官だったことがわかる。紀麻呂詩の次は文武天皇の御製が続くので、それ以降は文武朝以後の作品であろう。この紀麻呂「春日応詔」以降、巨勢多益須「春日応詔」(一九、二〇)、美努淨麻呂「春日応詔」(二四)、調老人「三月三日応詔」(二八)、藤原史「元日応詔」(二九)、「春日侍宴應詔」(三〇)と、侍宴應詔詩が多数掲載されているのである。

右の現象は、侍宴應詔詩が、天智朝時代に生まれつつも、天武・持統朝時代はほとんど製作されず、文武朝以降集中的に大量生産されていたことを示している。このような歴史的状況を踏まえたうえで、侍宴應詔詩についての考察を進めてゆこう。

二、文武朝以前の侍宴應詔詩

天智朝の侍宴應詔詩は、大友皇子「侍宴」を残すのみである。これ一首だけで、天智朝の全般的状況を語ることは困難ではあるが、『懷風藻』所載の大友皇子伝記によれば、皇子は沙宅紹明・塔本春初・吉太尚・許率母・木素貴子等、百済からの亡命貴族たちを賓客として遇している。このように、皇子には当時最高の学識者がブレインとして付いていたのだから、彼の詩も当時としては最先端を行っていたと思われる。したがって、大友皇子詩を検討すれば、天智朝侍宴應詔詩の水準や傾向は、ある程度知ることができるであろう。

皇明光二日月一 帝徳載三天地一 三才並泰昌 万国表二臣義一

(一)

右の詩はその大友皇子詩で、景物の描写など一切なく、皇徳賛美と天下太平を、抽象的な表現によって述べる。明君による文治という理念をストレートに出した内容と言えよう。

一・二句は日月天地に比することで天子の徳を賛美する。これは、「皇徳配三天地」^①、神明鑑三幽荒^②（晋傳玄「日昇歌」）や「日光二徳一、山河壮二帝居一」（陳後主叔宝「入隋侍宴應詔詩」）などの六朝詩に学んだことが、既に指摘されている。続く三・四句は天下泰平の万国に君臨する天子の雄姿を述べる。類似的表現は六朝から初唐に渡って見られるが、六朝期のそれがおおむね楽府歌謡の歌辞であるのに対し、初唐では次のように詩の形式のなかでよく詠まれている。

百蛮奉二遐賁一 万国朝二未央一
百靈侍二軒后一 万国会二塗山一

（唐太宗「正日臨朝」）
（魏徵「奉和正日臨朝應詔」）

右の例は君臣唱和の詩であり、大友皇子の侍宴應詔詩が詠まれた状況に近い。したがって、後半二句は、六朝の楽歌よりは、むしろ初唐の詩の影響を受けていると言うべきであろう。このように、大友皇子「侍宴」は、六朝の詩風だけでなく、すでに初唐の詩風をも取り入れていたと言える。

天智朝では、白村江での敗戦後、唐新羅連合国に対抗するために国制の变革が急務であった。そのため、百済からの亡命貴族の力を借りて中国の制度を導入し、大陸風の開明的な国家の建設を目指した。庚午年籍や近江令——吉田孝氏の述べるように、体系的な法典ではなかったとしても、画期的な単行法令群の存在は認めてよからう——がそれである。そのような政治上の開明化は文

学の面にも及んでいったようで、『懷風藻』の序では、天智天皇によって学校が建てられ、礼や法が定まったと述べた後に、次のように言う。

三階平煥、四海殷昌、旒纁無為、巖廊多暇。旋招^二文学之士^一、時開^二置體之遊^一。当^二此之際^一、宸翰垂^レ文、賢臣獻^レ頌。

天智天皇の文治政策によって天下が太平無事となったので、聖帝と賢臣とが酒宴を開き、君臣の唱和が行われたと言っている。天智朝の侍宴応詔詩は、このような、大陸風の開明的な文治政策が進められた時代的背景のなかで、六朝の詩風だけではなく、初唐の詩風、しかも太宗朝の御製や応詔詩をも学んで製作されていたのである。

ところが、続く天武・持統朝では侍宴応詔詩は製作されなかった。この時代は、律令制の導入を進めるなど、開明的な政策を採っているのだが、文化の面では伝統回帰の志向が見られ、国風顯揚時代と言われている。つまり、天皇が臨席する晴の場には、侍宴応詔詩のような漢詩ではなくて、和歌が詠まれていたと推測されるのである。柿本人麻呂「吉野讚歌」はその代表であろう。

このような空白期を経て、文武朝には再び侍宴応詔詩が晴の場に復活してくるのである。以下、文武朝の侍宴応詔詩について検討してゆこう。なお、『懷風藻』所載の作品のうち、どれが文武朝時代の製作であるかを正確に答えることは難しい。だが、小島憲之氏の述べるように、『懷風藻』の配列に従えば、境部王「宴長王宅」(五〇)以降は養老以後の作品で、道首名「秋宴」(四九)以前は遅くとも和銅年間頃までの作品と考えられる。したがって、

本稿では、下限が和銅年間頃までと考えられる四九番詩以前の詩は、文武朝に作られた可能性のある作品として、考察を進めてゆくことにする。

三、文武朝侍宴応詔詩の詩風

天智朝の侍宴応詔詩は、儒教的理念をストレートに詠み込み、また、初唐の詩風をすでに取り入れていたが、文武朝の侍宴応詔詩も、基本的には天智朝のそれを受け継ぐ。すなわち、初唐の詩風を取り入れながら、万国に君臨する天子の徳を賛美し、太平の世を謳歌するのである。まずは、藤原史「元日応詔」から見てみよう。

正朝觀^二万国^一 元日臨^二兆民^一 齊^レ政敷^二玄造^一 撫^レ機御^二紫宸^一 年華已非^レ故 淑氣亦惟新 鮮雲秀^二五彩^一 麗景耀^二三春^一 濟濟周行士 穆穆我朝人 感^レ德遊^二天沢^一 飲^レ和惟^二聖塵^一 (二九)

元日に天子が万国に望んで御殿に出ますと、春の気は新しくなつて、瑞雲をともなつた麗しい景色が開かれ、立派な百官たちが皇徳に酔いしれると言う。おそらく朝賀の饗宴を念頭に置いて詠んだものであろう。

その詩風は初唐的である。まず、「正朝觀^二万国^一」、元日臨^二兆民^一」については、大友皇子詩の「三才並泰昌、万国表^二臣義^一」と類似するが、この大友皇子詩の表現自体が、太宗「正日臨朝」及び魏徵「奉和正日臨朝應詔」などの詩句を学んでいたであろうことはすでに述べた。また、続く「齊^レ政敷^二玄造^一」淑氣亦惟

新」も、田村氏が指摘する「百靈滋^二景祚^一」、万玉慶^二惟新^一、待^レ旦敷^二玄造^一、輶^レ旋御^二紫宸^一」(許敬宗「奉和元日応詔」に倣ったものであろう。その他、「鮮雲秀^二五彩^一」、麗景耀^二三春^一」に見られる数字の対は、

広庭揚^二九奏^一 大帛麗^二三辰^一

(許敬宗「奉和元日応詔」)

弘^レ蛻九旗映 饒^レ鳳八音殊

(岑文本「奉和正日臨朝」)

などがあり、太宗朝の元日詩にはこれら以外にも用例が多い。

「済済周行士、穆穆我朝人」は朝廷に並ぶ官人たちを讃える句であるが、これについても、

肅肅皆鷁鷩 済済盛鸞紳

(顔師古「奉和正日臨朝」)

のような類句がある。

さて、ここで注目しておきたいのは、藤原史詩と類似の初唐詩として引例した詩句の所出である。それらはすべて唐太宗とその臣下たちの作った元日御製・応詔詩に求められる。この偏りは偶然ではあるまい。おそらく不比等は、元日の応詔詩を製作するに際して、唐太宗とその臣下たちの元日御製・応詔詩を意識的に参照したのであろう。

それ以外の詩についても見てゆこう。大友皇子「侍宴」では、六朝詩に倣って、皇徳を天地日月に比して賛美していたが、紀麻呂「春日応詔」も、「天徳^二堯舜^一」、皇恩落^二万民^一」(二四)と述べて一首を結び、万民を覆う天子の仁徳を聖帝堯舜に比して讃える。ただし、六朝的な賛美表現に倣った大友皇子に対して、紀麻呂のそれは、太宗朝の応詔詩の表現によっている。

鴻名兼^二轍跡^一 至聖俯^二唐堯^一

宸襟協^二堯智^一 遊芸発如^レ糸

(許敬宗「奉和詠集應詔」、《翰林學士集》所載)

天文光^二七政^一 皇恩被^二九区^一

(岑文本「奉和正日臨朝」)

時の天子を聖帝に譬えることは六朝以来によく見られるが、紀麻呂詩のように、今の天子を堯舜と同等あるいはそれ以上の聖帝と見なす(「協」はかなう、「俯」は見おろすという意味)ところは、右に挙げた褚遂良・許敬宗詩と等しい。また、岑文本詩の皇恩が全土を被うという句も、「皇恩落^二万民^一」と似ている。

他に、皇恩と同じ意味で、巨勢多益須「春日応詔」其一に「湛露恩」(二九)とあり、安倍首名「春日応詔」にも「湛露重^二仁智^一」、流霞輕^二松筠^一」(四三)のような句があるが、太宗朝の応詔詩の湛露・流霞を組み合わせた例を挙げよう。

輕輿臨^二太液^一 湛露酌^二流霞^一

(陳叔達「早春桂林殿應詔」)

先掲紀麻呂詩句の「天徳^二堯舜^一」は、皇徳を聖帝以上の存在に見なして賛美した句だが、巨勢多益須「春日応詔」其二は、別のものと比較して皇徳を称揚する。

姑射通^二太寶^一 崑崙索^二神仙^一

豈若瞻覽陳^二仁智^一寓^二山川^一

(二〇)

この場合は「A豈若B」という比較選択の形式を用いて、眼前の天子の遊覧所を神仙郷以上の地として称揚する。この形式を用いて天子の行動を賛美する表現は、太宗朝の応詔詩にいくつか見られるのだが、今は一例のみ掲げる。

稽山騰^二禹計^一 姑射瀉^二堯心^一

豈如臨^二碣石^一 軒衛警縱^レ金

〔許敬宗「遼東侍宴山夜臨秋同賦臨韻應詔」、「翰林学士集」所載〕
両者は「豈若」以外に「姑射」の句も共通しているので、多益
須は右の許敬宗詩に学んだと考えられる。

以上、大友皇子詩にも見られた、儒教的理念をストレートに詠
み込んだ表現について見てきた。その結果、大友皇子詩で既に表
れていた初唐詩撰取の方向が、文武朝の侍宴應詔詩では拡大され、
より新しい表現・発想が、初唐の特に太宗朝の御製・應詔詩から
ふんだんに取り入れられていたことが明らかになったと思う。そ
こで今度は、大友皇子詩には詠まれていなかった、いわば文武朝
の侍宴應詔詩独自の発想・表現について考えてみよう。

まず、先掲の藤原史詩の「年華已非^レ故、淑氣亦惟新」(二九)
にも見られるが、春の好ましい〈陽氣〉の到来が、文武朝の侍宴
應詔詩には盛んに詠まれる。

惠氣四望浮 重光一園春

(二四、紀麻呂「春日應詔」)

玉管吐^二陽氣^一 春色啓^二禁園^一

(一九、巨勢多益須「春日應詔」其二)

玉燭燦^二紫宮^一 淑氣潤^二芳春^一

(二四、美努淨麻呂「春日應詔」)

淑氣光^二天下^一 薰風扇^二海濱^一

(三〇、藤原史「春日侍宴」)

淑氣浮^二高閣^一 梅花灼^二景春^一

(三七、大石王「侍宴應詔」)

淑景蒼天麗 嘉氣碧空陳

(四二、采女比良夫「春日侍宴應詔」)

万物のエネルギーとしての〈陽氣〉が訪れるというこの発想は、
いきおい、後に続く景物描写や宴會描写に活氣を持たせることに
なり、一首全体に重要な位置を占める。このような発想は天智朝

のみならず天武・持統朝にもないので、文武朝の詩人たちによつ
て開発されたと思われる。これらの中で、初唐詩との関係を指摘
すると、例えば「玉管吐^二陽氣^一、春色啓^二禁園^一」(一九)は、管
樂器が陽氣を吐き出して、春の景色が庭園に広がると言うが、管
樂器と好ましい〈陽氣〉との対応を詠む点については、

條風開^二猷節^一 灰律動^二初陽^一

(太宗「正月臨朝」)

玉律応^二青陽^一 鸞駕幸^二春方^一

(高士廉「春日侍宴望海應詔」、「翰林学士集」所載)

などの類句がある。ちなみに、六朝詩に同様の表現は見当たらな
い。また、「淑氣潤^二芳春^一」(二四)は、田村氏の指摘する「淑氣
動^二芳年^一」(太宗「春日玄武門宴群臣」)と三字も共通し、また、発
想や句構成も同類といえる。さらに、「淑氣光^二天下^一、薰風扇^二
海濱^一」(三〇)の後句は、

蒼山帶^二落日^一 麗苑扇^二薰風^一

(許敬宗「後池侍宴迴文詩應詔」、「翰林学士集」所載)

とよく似ている。それぞれ引例の表現に倣ったのであろう。

文武朝の侍宴應詔詩に独自の内容の第二は、次に挙げる歌舞音
楽の描写である。

松風催^二雅曲^一

(一九、巨勢多益須「春日應詔」其二)

糸竹時盤桓 文酒乍留連

薰風入^二琴台^一 莫日照^二歌筵^一

(二〇、同右其二)

糸竹遏^二広楽^一 率舞洽^二往塵^一

(二四、美努淨麻呂「春日應詔」)

八音寥亮奏

(三五、刀利康嗣「侍宴」)

琴瑟設二仙簫

(三七、大石王「侍宴応詔」)

舞袖留二翔鶴

歌声落二梁塵 (四〇、石川石足「春苑応詔」)

舞衣搖二樹影

歌扇動二梁塵 (四三、安倍首名「春日応詔」)

これらのうち、二〇、二四、三五番詩などには、かなり大掛かりな舞楽の情景が描かれている。当日の酒宴では、管絃楽団を伴った歌舞音楽が大々的に催されていたのであろう。このような表現が用いられるようになる背景には、外来楽の整備・発展があったはずだが、後述する如く、文武朝では唐の燕饗新雅楽の導入が本格的に行われていた。勿論、朝鮮系の三国楽は推古朝のころには既に伝来していたので、天智朝の人々が外来楽を知らなかったわけではない。しかし、天智紀には外来楽の演奏記事はまったくなく、天智朝の為政者は外来楽にあまり興味を示さなかったものと見受けられる。盛大な歌舞音楽を描写するような雰囲気は、天智朝にはなかったのではないか。したがって、これも文武朝詩人が開発した表現と認められよう。

ところで、これら歌舞音楽の描写もまた、太宗朝の詩には多数見られる。まず、「采竹時盤桓、文酒乍留連、薰風入二琴台一、冀日照二歌筵一」(二〇)は、田村氏が指摘する「湛露晞二桑日一、薰風入二舜弦一」(杜正倫「玄武門侍宴」)、「放曠山水情、留連文酒趣」(令狐德棻「冬日宴于庶子宅各賦一字得趣」)の二例を組み合わせて作りに上げた句であろう。作者の杜正倫、令狐德棻とも太宗朝の官人である。

「采竹遏二広楽一、率舞洽二往塵一」(二四)と類似の表現としては、

娛賓歌二湛露

広楽奏二鈞天一 (太宗「春日玄武門宴群臣」)

庭夷超二王会一

広楽盛二鈞天一 (魏徵「奉和正日臨朝應詔」)

自欣栖二大廈一

率儔為二聞韶一

(許敬宗「賦得阿蘭風應詔」、『翰林学士集』所載)

などがある。また、「舞袖留二翔鶴一、歌声落二梁塵一」(四〇)と「舞衣搖二樹影一、歌扇動二梁塵一」(四三)はほとんど同じ表現といってもよいが、特に後者が、

送影舞衫前、飄飄香歌扇裏 (上官儀「八詠应制二首」其二)

に依ることは間違いないだろう。順序が逆になったが、「八音寥亮奏」(三五)と類似の句としては、先に引用した「饒風八音殊」(岑文本「奉和正日臨朝」)がある。なお、この三五番詩の句の後をまとめて引用すると「八音寥亮奏、百味馨香陳、日落松影闊、風和花氣新、俯仰一人德、唯寿万歳真」となるが、これも次に挙げる太宗朝の侍宴應詔詩を参照して詠まれたものであろう。

日斜林影去 風度荷香来 既承二百味酒 願上二万年杯一

(長孫無忌「早秋侍宴應詔」、『翰林学士集』所載)

日が暮れて風が花の香を運んでくるといったところや、「百味」の詩句、天子の万歳を言祝ぐ祝辞など、極めて近い。

見てきたように、日本の侍宴應詔詩は、大友皇子から既に唐太宗朝の御製・應詔詩の影響を受けてきた。が、文武朝の侍宴應詔詩では、その影響が、藤原史詩を筆頭に広範囲に渡っている。特に、文武朝侍宴應詔詩独自の表現にその影響が著しいようである。それは海彼の気の効いた表現を取り入れるといった程度のものである。は、いわば文武朝の君臣和楽の文学それ自体が、太宗朝のこ

ピーであるかの如き様相を呈していると言ってもよからう。こうした現象が偶然に起こったとは考えられない。

こうした現象が起こった背景としては、まず太宗朝の作品が日本に既に伝来されていたことが考えられる。具体的には、引例の出典として掲げた『翰林学士集』がある。この詩集は別名『貞観中君臣唱和集』とも言われるように、唐の貞観中における太宗とその諸臣たちとの唱和の詩を集めたものである。また、太宗の別集である『太宗文皇帝集』が伝来していた可能性も、小島氏が指摘している。文武朝の官人たちがこれらの詩集を参考にしたことは十分有り得る。しかし、既に伝来しているからそれを参照したというだけでは、太宗朝詩へのこれほどまでの偏りは説明できない。文武朝の詩人たちには、太宗朝に対するある種の憧憬があったのではなからうか。

唐太宗といえば、いわゆる「貞観の治」とよばれる太平の世を現出させた皇帝であり、貞観の治の盛世ぶりは、『貞観政要』によって我が国にも広く知られるところであった。この『貞観政要』の初進本は、七〇五年から七〇七年の間に成立したといわれる。布目潮風氏の述べるように、この書物の編纂は、太宗の没後五十数年を経て、太宗を明君として理想化する気運が生まれ、それがやがて結実したこと意味している。⁽¹²⁾これは唐の武后朝末期から中宗朝初期にかけて、日本ではちょうど文武朝に当たる。勿論、『貞観政要』そのものが文武朝に伝来されていたとは考えられないが、当時の日本は唐の動向について敏感であつたらしく、第七回遣唐使の栗田真人が帰国して、則天武后が即位し国号を周

に改めたことを報告している。⁽¹³⁾この遣唐使は天智八年（六六九）以来の派遣であつたが、それ以前にも、武后の治世のことは伝わっていたらしい。それは、那須直が没した文武四年（七〇〇）にちなむ那須国造碑文に、武后時代の年号である永昌や、則天文字が使用されていることからわかる。おそらく新羅を経由して、唐の情報が日本にもたらされていたのであろう。したがって、武后朝末期から中宗朝初期に形成された明君太宗像が文武朝に伝わっていても、何の不思議もないのである。

唐のこうした気運を理解した上で、文武朝の侍宴応詔詩の作者たちは、唐太宗朝に作られた君臣唱和詩の詩風を組織的に導入して、天皇賛美の詩を作っていたのであろう。それは、理想的な君主としての太宗像を投影することで、新たな帝王像を文武天皇に求めていたからと考えられる。では、文武朝の詩人たちはなぜそのようなことをしたのであろうか。また、彼らが求めていた新たな天皇像とはいかなるものであつたのだろうか。その点について考察を進めてみよう。

四、文武朝侍宴応詔詩の作者とその時代

次に掲げるのは、一四ノ四九番詩、すなわち、文武朝から和銅年間にかけての作品のうち、侍宴応詔詩を残す作者と、彼らの文武朝前後の官職等である。

紀麻呂 大納言（大宝元）

巨勢多益須 判事・撰善言司（持統三）↓式部卿（慶雲三）

美努淨麻呂 遣新羅大使（慶雲三）↓大学博士（年次未詳）

調老人

撰善言司（持統三）↓大学頭（年次未詳）↓律令

撰定（文武四）

藤原不比等

判事（持統三）↓律令撰定（文武四）↓大納言（大

宝元）

刀利康嗣

大学博士（ただし官位相当制によれば和銅三以降）

大石王

弓削皇子の喪事監護・山科山陵修造（文武三）↓

河内守（大宝三）

田辺百枝

律令撰定（文武四）↓大学博士（年次未詳）

石川石足

河内守（和銅元）

山前王

刑部卿（年次未詳）

采女比良夫

文武天皇大葬の御装司（慶雲四）

阿倍首名

大宰少貳（慶雲三）

大伴旅人

左將軍（和銅三）↓新羅使迎兵將軍（同七）

これを見ていると、作者の官職等にある種の偏りがあることがわかる。まず第一に、律令を撰定した調老人、藤原不比等、田辺百枝や、律令格式の該当条文を引用して判決を下す判事を務めた巨勢多益須など、律令の制定・運用に当たっていた人が多数いることである。その筆頭が、律令貴族の代表格とも言える藤原不比等であることは言うまでもあるまい。彼が大納言職を務めるようになったのは、大宝令の規定を受けて新太政官体制が発足したときである。この大宝元年三月に任命された議政官の構成は、「典型的な律令貴族である不比等が、やがて政界を主導する第一の飛躍台になったことと、壬申の功臣氏を代表する大伴宿禰安麻呂の疎外とが特徴的」と言われる。すなわち、守旧派貴族の勢力が後

退し、新興の律令貴族が国家運営の主導権を握るようになったのである。

それ以外にも、右に挙げた侍真応詔詩の作者の中では、紀麻呂や山前王も律令に通じた人物であったと思われる。まず、紀麻呂は不比等と同じく大納言職にあるが、おそらく彼も律令貴族で、不比等と協同して律令国家の運営に当たっていたのであろう。慶雲二年（七〇五）の中納言設置で、大納言の定員を四人から二人に減じた折にも、不比等とこの任を継続しているが、これは不比等と麻呂が二人三脚で国家の運営に当たっていたことを示している。また、山前王は刑部親王の子であるが、刑部親王は律令撰定を皇親として主宰し、また、初代の知太政官事に任ぜられて太政官の政務を統べ、草創期の律令政治に貢献した人物である。そのような人物の子でもあるからには、律令国家の運営に携わっていたかどうかは別にして、少なくとも律令制の思想や理念は十分理解していたであらう。紀麻呂、山前王の両者とも、律令の制定及び運用者と同列に見なしてよい。

このように見てくると、第二の点、すなわち、大学頭や大学博士、及び大学寮を管理する式部卿など、大学寮関係者が多いということも、第一の点と関わりがあると思われる。大学寮とは経学教授を基幹とする官吏養成機関で、その関係者は当時最も漢籍に通じた知識人であった。彼らこそ、大宝律令の母法である唐律令や、律令制を支える規範的倫理としての礼を十分理解し、日本における律令の制定や律令国家の運営に不可欠の知識を所持していたはずである。彼らの協力なしに律令国家を運営することはで

きなかつたであらう。

要するに、文武朝の侍宴応詔時は、新興の律令貴族及び律令に詳しい大学寮官僚などを中心に量産されていたのである。彼らは律令撰定に当たって、唐の律令を相当研究したはずだが、律令の理念である礼の思想、すなわち教化主義・徳治主義や、当時としては最新の唐の礼楽思想などにも触れたであらう。そして、律令国家の完成には、法律の条文を機械的に模倣するだけでは不十分で、唐の思想や文化をも取り入れる必要があることを悟ったと思われる。それ故、以下に述べる如く、文武朝において、それらの吸収が強力に推し進められていったのである。

『続日本紀』は、大宝元年（七〇二）正月の元日朝賀の儀について次のように記す。

其儀、於三正門一樹二鳥形幢^レ。左日像・青竜・朱雀幡、右月像・玄武・白虎幡。藩夷使者、陳三列左右^レ。文物之儀、於^レ是備矣。

この儀式のねらいは、三種の旗や、天子の行進の際に用いられる中国風の四神旗を掲げ、新羅使・蝦夷・蝦狄・南島人などの藩夷を左右に整列させることで、ミニ中華帝国を現出させるところにあったと言われる。⁽¹⁹⁾ この前年には大宝律令が完成しており、そのことを踏まえれば、この元日朝賀の儀式は「化外に諸藩・夷狄を従え、化内（国内）を『国』に分割して天下を実現した帝国型の国家形態が大宝律令により法制化された⁽²⁰⁾」ことの表れと言えよう。ここに唐帝国に対する東夷の小帝国が完成したのであり、「文物之儀、於^レ是備矣」という評言には、当時の為政者の自負が感じ

られる。そして、新たな帝国型国家の元首となった天皇には、中国皇帝の如く振る舞うことが要請されたに違いない。この大宝元年の元日朝賀の儀（及び文武二年のそれ）では、天皇が外交使節の前に姿を現しているが、田島公氏によれば、これは外交の主体が皇帝にある中国の賓礼（外交儀礼）を取り入れた結果で、それ以前の推古朝までの倭国王は伝統的に外国使に会見することがなく、また、律令国家形成の過渡期にある天武・持統朝においても、その伝統は続いていた。⁽²¹⁾

このように、文武朝においては、外交に姿を現さぬ隠れた王から、藩国・夷狄にも君臨する小帝国の皇帝というように、天皇像が変化したのである。それは、国際舞台での現実的地位は別として、当時の為政者の観念においては、天皇に対する意識が、東夷の国王に過ぎぬ地位から藩国を従える帝国の皇帝へと成長したことを意味しているよう。

この天皇像の変化は、文化的在り方にも影響を及ぼしてくる。つまり、小帝国の皇帝にふさわしい文化が求められてくるのである。大宝二年（七〇二）正月十五日には、次のような酒宴の記事が載せられている。

宴三群臣於西闕^一。奏五常・大平楽^一、極^レ歡而罷。賜^レ物有^レ差。

五常・大平楽が群臣の前で演奏されたと言っているのである。

岸辺成雄氏は初唐の雅楽について次のように述べている。唐初においては、儒学の礼楽思想に基づき、南北朝の兵乱で荒廃した雅楽の復興が図られた。しかし、胡楽の影響や俗楽の発達によつ

て大きく変化していた唐代の一般の音楽に比べて、中国古来の雅楽は甚だしく劣っていた。そこで、古来の雅楽に新時代にふさわしい生氣を吹き込み、礼楽思想の本旨に沿うように加工された燕饗新雅楽が製作された。以上の岸辺説を踏まえて私見を述べれば、右の「大平楽」は、隋代に製作され、中唐の玄宗朝に成立した二部伎の立部伎第二曲に取り入れられた同名の燕饗新雅楽と同種のものであったと思う。また、次の「五常楽」は、唐楽の曲名にも見えず実態がはっきりしないが、「大平楽」と一緒に演奏されていることからすれば、隋から唐にかけて作られた燕饗新雅楽のひとつで、中国でその後に整理されて消えてしまった楽曲だったのではない。

ところで、唐楽の導入は文武朝以前に既にあったと言われている。林屋辰三郎氏は、舒明紀四年十月条に、唐の使人高表仁を迎えるに際して「鼓・吹・旗幟」すべて揃っていたとあることから、このときには既に鼓吹の唐楽は伝わっていたと言おう。しかし、荻美津夫氏は、鼓吹は推古二十六年八月に高句麗からもたらされているので、この鼓吹が唐より伝えられたとは言えないと述べ、律令制との関連から考えて、唐楽は天武朝のころに流入したとする。唐楽推古朝流入説を否定し、唐楽導入を律令制と関連させる説は支持できるが、その時期を天武朝とする点は根拠を持たない。確かに天武紀には奏楽の記事が二年九月・十年正月・同年九月・十一年七月・十二年正月・朱鳥元年四月と六回もあり、外来楽の演奏が盛んに行われていたことは事実である。しかし、十二年正月十八日条に「奏二小壺田儼及高麗・百濟・新羅、三国楽於庭中」

とあるように、天武朝に整備された外来楽は、朝鮮系のいわゆる三国楽だったのではないか。天武朝には、遣新羅使の派遣が三回、新羅使の来訪が十五回あり、新羅との通交は盛んであったが、遣唐使は一度も派遣しておらず、唐とは絶縁状態であった。このような外交関係からも、天武朝に整備された外来楽は、やはり三国楽が中心であったと思われる。また、持統紀には、天武天皇の殯宮饗礼での奏楽記事が元年正月に一例あるのみで、持統朝は天武朝で完成された外来楽をただ伝えていただけの時代だったと思われる。このように見てくると、唐帝国の燕饗新雅楽が導入されたのは、文武朝のことと考えられ、それは、小帝国の皇帝にふさわしい音楽が整ったという意味で、文化的に極めて画期的な出来事であったと言えよう。

五、まとめ

文武朝とは、大宝律令に基づく新体制が開始され、東夷の小帝国が完成された時代であった。中国全土の統一を成し遂げた隋唐帝国で製作された新しい燕饗新雅楽は、この新興小帝国の文化を飾るために是非とも必要とされたのであろう。勿論、中国の制度・文化の導入は、文武朝に始まったわけではない。大化の改新によって律令国家への転換が図られて以来、天智・天武・持統朝と律令国家の建設は進められ、それにもなつて、制度や文化の唐風化も徐々に進んでいた。しかし、述べてきたように、大宝律令の完成した文武朝は、小帝国の完成という目標をもって、意識的かつ組織的に唐風化が押し進められていたらしく、特に天皇像の唐

風化は著しい。そもそも、日本律令作成の基準となった中国律令は、唐高宗がつくった永徽律令と言われている。⁽²⁵⁾ 文武朝には、律令の完備した小帝国にふさわしい開明的な天皇が求められたであろうが、唐帝国皇帝がそのモデルとなるのは極めて自然なことである。

律令国家を完成させた為政者の間では、新時代を飾る新しい文学の必要性が、痛切に感じられていたに違いあるまい。それは律令の完備した小帝国にふさわしい文学でなければならなかったであろう。その模範とされたのが、貞観の治で有名な明君太宗とその諸臣による君臣唱和詩だった。文武朝の侍宴詔詩の作者たちが、文武天皇を明君と誉れの高かった太宗に比するのは、このような時代の要請を受けてのものであったと考えられる。要するに、文武朝の侍宴詔詩は、律令国家の完成に伴って、小帝国にふさわしい天皇像を模索する気運の中から生まれたもので、律令貴族や律令に詳しい知識人たちが中心となって、唐太宗朝の君臣唱和詩に範を取りながら大量に生産された天皇賛美の詩である、と規定できよう。

注(1) 大津皇子「春苑言宴」が侍宴詔詩でないことについては、拙稿「大津皇子の詩——その文学史的位置——」(『和漢比較文学』

十三) 参照。

(2) 田村謙治「懷風藻の詩と六朝詩との関係——出典を中心として——」(『国語と国文学』一九五〇・九)。以下、田村氏の指摘はすべてこの論文による。

(3) 中西進「万葉集における古代朝鮮」(『万葉の時代と風土』)に指摘がある。

(4) 吉田孝「大系日本の歴史3 古代国家の歩み」九四頁。

(5) 橋本達雄「万葉宮廷歌人の研究」一一九頁。

(6) 小島憲之「上代日本文学と中国文学下」一二四八頁。

(7) 『翰林学士集』所載詩の本文及び訓点は、村田正博・栗城順子編『翰林学士集・新撰類林抄 本文と索引』による。以下同じ。

(8) 欽明紀十五年二月条に百濟からの楽人貢上の記事があり、推古紀二十六年八月条に高句麗からの鼓吹貢献の記事がある。

(9) 天智紀十年五月五日条に田舞奏上の記事があるが、田舞が外来楽でないことは言うまでもない。

(10) 小島憲之「近江朝前後の文学 その一——時と歌——」(『万葉以前』)は、大津皇子「遊獵」において、『太宗文皇帝集』が影を落としていると言う。

(11) 原田種成「貞観政要の研究」三二一頁。

(12) 布目潮風「隋唐帝国の成立」(『岩波講座 世界歴史5』)。

(13) 『続日本紀』慶雲元年七月条。

(14) 『寧楽遺文』下九六五。

(15) 野村忠夫「奈良時代の政治過程」(『岩波講座 日本歴史3』一九七六年版)。

(16) 林陸朗「完訳注釈 続日本紀」注釈。

(17) 石上英一「古代東アジア地域と日本」(『日本の社会史1 列島内外の交通と国家』)。

(18) 石母田正「日本古代における国際意識について——古代貴族の場合——」(『石母田正著作集4 古代国家論』)。

(19) 田島公「外交と饗礼」(『日本の古代7 まつりごとの展開』)。

(20) 岸辺成雄「唐代音楽の歴史的研究 楽制篇下」三四三頁。

(21) 注20掲書三四七頁。

(22) 「常」は類聚国史本「帝」に作る。

(23) 林屋辰三郎『中世芸能史の研究』一八三―四頁。

新刊紹介

宮坂 學編

『芥川龍之介全集総索引付年譜』

本書は、岩波書店版『芥川龍之介全集』（全十二巻、一九七七年）所収本文を対象として作成した索引だが、同全集の別巻ではない。勿論、このような索引を、出版当初より別巻として具える基盤との評を博した同全集にとっては、玉にきずといわなければならなかった。

当索引は、芥川作品索引（全作品の表題及び作者自身が自作に言及した箇所）、人名索引（作者別名付載）、引用作品索引の三部から成り、詳細で便利なことと言うまでもない。その上、芥川龍之介年譜が付いていることは、本書のもう一つの特徴である。ありとあらゆる資料を駆使したこの年譜も、詳細を極めたものであり、芥川の言行をほぼ日単位に究明しようとする、「年譜」というより「日譜」と呼びたいほどの野心作である。

本書は、編者が一念発起してから数年もの歳月を費やした労作であり、芥川文学の研究者にとつては、机上に常備すべき、待望の参考書である。

（平5・12 岩波書店 A5判 二五六頁 四八〇〇円）
（施 小偉）

原子朗著

『修辞学の史的研究』

長年にわたり日本の近代文学、文体論研究を主導してきた原子朗氏の待望の書『修辞学の史的研究』がこのたび上梓された。

〈早稲田学〉と証してもよい、高田半峰、坪内逍遙、島村抱月、五十嵐力といった連綿たる〈修辞学〉の学統に連なる、著者自らの、これらの学恩に対する返礼の書でもある。他に、前島密、大西祝、大塚保治、長谷川天溪、服部嘉香等のキイバースンも縦横に關つた「書く」そして読むための理論と実践」の言語表現理論の総体に、原氏の手によって今ここに、その新たな史的バースペクティブとしての表現が与えられた。早稲田修辞学のみことな〈掘り起こし〉である。

従来の〈修辞学の系譜〉に対する曲解を正し、不当な評価軸や、蒙昧なイメージからそれを解き放つこの困難をさわる作業は、同時に〈早稲田学〉と陰に陽に運動した〈自然主義思潮〉や〈口語自由詩〉を表現史的に捉え直す成果をもたらした。著者が卓越する文学史家でもある

(24) 荻美津夫『日本古代音楽史論』六一頁。

(25) 井上光貞『日本律令の成立とその注釈書』（日本思想大系「律令」）。※人物の伝記等については、『日本古代氏族人名辞典』を参照した。

ゆえんであろう。

著者によって、逍遙、五十嵐力をはじめ秀れた〈修辞学〉者は、あらためて人文科学の統合者としても立ちあらわれる。タコ壺化しがちな学芸ジャンルの隣接領域に風穴を明け相互に交通し合う〈学〉や〈知〉の精神共同体的な場を招喚し、開示する役目を引き受けている。著者自らもまた、こうした学問や大学のあるべき姿を後続の学徒達に書伝書承する。情熱と使命感あふれた真の批評行為をともなった、文字通り渾身入魂の〈生きている学術書〉がここに生誕したのである。向後、あらゆる学問創生における精神共同体的発想のあり方を強く促し、研究という名の、「旺盛な読者意識に裏打ちされた学的読書行為論」の実践の手法となつてゆくであろう。

本書は、多くの大学人、近現代の文学研究や表現行為に携わらんとする者の、今後必ずや参照されてゆかねばならぬ、大いなる共有財産である。付載の詳細な関連年表と、このたび著者によって発見された逍遙の〈修辞学〉講義ノートの翻刻資料も、きわめて貴重である。

（平6・11 早大出版部 A5判 三三四頁 三六〇〇円）
（高橋 世織）